

【計画名： いかす・なら地域計画】

①計画目標の達成状況

目標項目名(単位)	R2			R3			R4		R5		R6	
	目標	実績	達成率	目標	実績	達成率	目標	実績	目標	実績	目標	実績
①来訪者の満足度(日本人)(%)	83	86	103%	84	86	102%	85		86		87	
②来訪者の満足度(外国人)(%)	96.2	87	91%	96.2	100	104%	96.2		96.2		96.2	
③来訪者数(日本人)(千人)	44,214	26,233	59%	45,660	集計中	—	47,110		48,560		50,000	
④来訪者数(外国人)(千人)	2,580	未集計(観光庁統計)	—	3,060	未集計(観光庁統計)	—	3,540		4,020		4,500	
⑤宿泊者数(日本人)(千人)	2,134	1,233	58%	2,165	1,541	71%	2,210		2,265		2,310	
⑥宿泊者数(外国人)(千人)	461	51	11%	595	6	1%	730		865		1,000	
⑦中核となる拠点施設への来訪者数(千人)	175	79	45%	219	139	63%	822		855		861	
⑧県民満足度のうち「文化遺産や史跡が大事にされること」(ポイント)	3.57	3.51	98%	3.57	3.57	100%	3.57		3.57		3.57	

③計画で取り組んだ事業の進捗状況

事業番号	事業名	R2	R3	事業類型毎の実績額
事業番号 1-①	地域の文化資源理解促進事業	県内社寺と連携し、講話及び精神文化を題材とした映像のコンテンツ配信を実施	万葉百科システムの整備を実施	48百万円
		奈良国立博物館と連携し、文化観光コンテンツの発信を実施	文化資源の価値を分かりやすく伝えるVRコンテンツ制作を実施	
		—	「知られざる文化財継承の裏側」を見せる目的として、アーカイブ映像及び講話の配信を実施	
—	文化資源をストーリーで説明する映像及びマンガコンテンツを制作・発信を実施			
事業番号 1-②	文化施設の連携によるプロジェクトの実施	文化施設の連携による共通券連携事業を実施	—	1百万円
事業番号 3-①	文化施設を活用した特別ツアーメニュー開発事業	—	万葉文化館を活用した特別ツアーメニュー開発を実施	1百万円
事業番号 5-①	拠点施設の利便性・アメニティ向上事業	橿原考古学研究所附属博物館展示の多言語化等を実施	橿原考古学研究所附属博物館展示の多言語化等を実施	74百万円
		民俗博物館展示の多言語化等を実施	万葉文化館トイレのバリアフリー化を実施	
		橿原考古学研究所附属博物館トイレのバリアフリー化を実施	文化観光拠点施設のWi-Fi環境の整備を実施	
		民俗博物館トイレのバリアフリー化を実施	文化観光拠点施設のキャッシュレス化システムの整備を実施	
各年度ごとの実績額→		59百万円	65百万円	124百万円

②計画目標の達成状況に関する分析・評価

<p>(分析)</p> <ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染拡大の影響により、全体的に目標値を下回った。 来訪者数(日本人)の実績値に関する調査結果は集計中であり、結果が分かるのが12月頃となる見込み。 来訪者数(外国人)の実績値に関する調査については、4月から9月の調査が観光庁において行われていないため、比較できる実績として記載することが困難。 <p>(評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染拡大の影響により、⑤・⑥・⑦の目標を達成することができなかった。 ⑧の指標については、歴史文化資源の活用に関する取り組みの結果、目標値を達成することができた。

④事業の進捗状況に関する分析・評価

<p>(分析)</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業番号5-①により実施した橿原考古学研究所附属博物館の多言語化、万葉文化館のバリアフリー化事業、文化観光拠点施設のWi-Fi環境整備、キャッシュレスシステムの導入は、利用者の満足度向上につながっている。 <p>(評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業番号1-①により整備した万葉百科システムのデータベースアクセス数は、新型コロナウイルス感染拡大によるシステム改修スケジュールの変更により、1,900件となった。今後、来館のきっかけとなる仕組みづくりに取り組んでいく。

⑤拠点施設の要件に関する取組状況

要件	↓文化観光拠点施設名					
	独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館	奈良県立美術館	奈良県立民俗博物館	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県立万葉文化館	なら歴史芸術文化村
<p>・文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介</p>	<p>1895年に開館した仏教美術を中心に展示公開する博物館。「なら仏像館」は奈良で最初に建てられた本格的な洋風建築で、重要文化財に指定されている。館内には飛鳥時代から鎌倉時代までの貴重な仏像や中国・朝鮮半島の仏像など、常時100体以上を展示している。「東西新館」では毎年恒例の正倉院展をはじめ、様々な特別展を開催する。他にも春日大社のおん祭や東大寺二月堂のお水取りなど、奈良に縁のある伝統行事の展示にも力を注いでいる。</p>	<p>年4回程度開催する展覧会ごとに、地域にちなんだ多彩なテーマを設定することで、出品作品を通して展開する文化的なストーリーや多種多様な美術の表現を体系的に紹介。</p>	<p>奈良の生活文化に関わる多彩な実物資料により、季節毎のくらしや行事を紹介。また、モノづくりの技術や道具などを通して、奈良の魅力を多角的に伝える。26haの広さのある公園を活用し、移築元のエリア毎に移築古民家を展示。所蔵資料との連携により、よりわかりやすい解説を行っている。</p>	<p>常設展示資料の多くは奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査で出土したもの。発掘時の写真や図、イラストを交えた解説パネルを多用し、理解しやすい展示をおこなっている。橿原考古学研究所は50名を超える考古学、古代史、保存科学などの研究者を有する。博物館では、その最新の研究成果を講演会、学芸員による展示解説、こども考古学講座、遺跡見学などの様々な機会を通じて来館者に還元している。</p> <p>当館は展示環境、来館者環境改善のための改修工事（空調、展示ケースなど）を令和3年度前半まで実施し、同年11月3日にリニューアルオープンした。常設展示は、重要文化財黒塚古墳出土品など、過去20年間に当研究所が発掘した重要な資料を加えて一新した。古代国家成立の中心であった奈良県の考古学・古代史について、多くの「本物」から、一層理解を深めてもらえるよう、展示方法、照明などの工夫によって、より視覚に訴える魅力的な展示とした。</p> <p>再開後の令和4年1月には「特別陳列 Dear Paimyra、廃墟からの希望」、2・3月には「国宝高松塚古墳壁画発見50周年記念展」を開催するなど積極的な展開をおこなっている。さらに4年4月からリニューアルオープン記念春季特別展「八雲立つ出雲の至宝」を開催するなど、休館前同様、年2回の特別展、奈良県内の最新の発掘調査成果を紹介する速報展「大和を掘る」、館蔵品中心の特別陳列などの企画展を開催するほか、一層の情報発信に努め、考古学・古代史の最新成果・情報を提供する一大拠点としての役割を強化する。</p>	<p>「e-RaD」に登録された研究機関として、文学だけでなく歴史学など幅広い視点から「万葉古代学」の研究を行っており、その成果について当館主催の各種講座をはじめ、寄稿、出稿など様々な機会でも普及を図っている。</p> <p>現代日本画壇を代表する画家が「万葉集」に詠まれた和歌をモチーフに描いた「万葉日本画」154点ををはじめ700点余に上る美術品を所蔵し、それらの公開や企画展などに6回程度の展覧会を開催している。</p> <p>・「時空を超えて万葉人に会える空間」として、多数のディスプレイやフィギュアを用いて古代の「市」を再現した「歌の広場」や万葉歌にまつわるストーリーを展開する「万葉劇場」等を備え、往時の雰囲気を感じつつ万葉世界を楽しく学ぶことができる。</p> <p>「万葉集」に詠まれた草木、花が植えられた「万葉庭園」は、四季折々に花が咲き、散策を楽しめるとともに、野外ステージを活用してイベントを開催することもできる。</p> <p>古代の工房を含む「飛鳥池工房遺跡」の上に立地し、「飛鳥宮跡」にも隣接していることから、こうした遺跡やその出土品の保存に資するとともに、歴史学や考古学の研究成果を発信する「特別展示室」を既に設けている。今後、工房跡から出土した日本最古の銅銭「富本銭」の展示を行うことも視野に、5年後を目途に歴史探訪のガイダンス施設としての機能を更に高めていく予定。</p>	<p>奈良県の文化財を展示するだけでなく、その修復過程や技術について、映像やパネルによる紹介のほか、ガイドによる解説や、企画展を実施、文化資源のデータベースを構築、公開し、来館者が文化財を保存継承していく意義等についてより深く理解できる機会を創出。</p> <p>また、国内外から招いたアーティストによる奈良の文化資源を生かした制作活動の公開や作品展示、ギャラリートークを実施。アーティストが県民とふれあうことにより、地域の魅力を再発見してもらい、芸術文化への関心層の拡大につなげるほか、未就学児等を対象にした奈良の素材を活用したアートプログラムも提供。「遊び」を通じたアートを体験してもらうことにより、芸術文化に親しむ環境を提供。</p> <p>その他、文化財の修復にも繋がる伝統工芸技術を、工芸品の展示販売やワークショップを通じて発信したり、県産食材の料理を、関連する食文化・農村文化の背景を交えて提供したり、調理体験の場を提供するなど、様々な角度から、奈良の文化資源の魅力を伝える取組を実施するほか、歴史文化資源や観光などの情報を開村時から発信。</p>
<p>・情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介</p>	<p>展示室のオーディオガイドの導入、ホームページ、Twitterの活用、オンラインチケット活用の取り組みを実施。また、法人内の所蔵文化財をColBaseにて集約、公開している。令和3年度より教育普及サイト「ならはく教育普及室」を開設し、教育に関するイベント情報の発信、ワークシート等のコンテンツ提供を行っている。また、公式Youtubeチャンネルを開設し、展覧会の解説動画を中心とした情報発信に取り組んでいる。</p>	<p>所蔵作品画像のデータ化の推進。画像による解説とその配信を利用した情報発信の多角化。</p>	<p>保有資料をデータベース化、クラウドシステムを導入し、資料紹介・展示解説に着手。（2021年度約1000点公開済、順次公開点数拡大予定。）</p> <p>また、Wi-Fi整備により、上記データベース等へのアクセス環境を確保した。</p>	<p>研究所と博物館のデジタルアーカイブを整備して収蔵品データを公開型に再構築し、ホームページで公開する。展示室においては、目の前の展示資料の詳しい情報を情報端末から引き出してもらうことで、より深い理解を可能とする。（令和4年度）</p>	<p>貴重な古典籍をはじめ万葉集に関する様々な情報を提供するデータベースとして「万葉百科システム」を既に構築している。今後、2年後を目途に、内容や運用システムを更新し、よりアクセシビリティの高いシステムとしてリニューアルしていく予定。</p> <p>「歌の広場」や「万葉劇場」等のコンテンツについても、順次VRやARなどのシステムを導入し、よりリアリティのある手法で最新の情報を提供できるよう5年後を目途にリニューアルしていく予定。</p>	<p>デジタルデータを活用して製作したVR映像やレプリカ等を活用し、文化財の細部やスケール等の観察など臨場感のある体験プログラムや、素材を身近に感じる体験プログラムを開村時から実施。</p> <p>また、さらに深く文化財の関連情報にアプローチし、関心を深めることができるよう、文化財修復時の図面、仏像のCGや無形文化財の映像など、文化村で保管する資料の一部についてデジタル化したものの検索、閲覧が可能なアーカイブコーナーを設置。（※1F入口付近のPC2台）</p>
<p>・外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介</p>	<p>入り口の看板や展示解説については4か国語にて対応している。総合案内では英中2か国語での対応が可能である。館内展示等の英中韓翻訳スタッフを配置している。なおColBaseも4か国語対応をしている。</p>	<p>展示内容に加え、展示全体のストーリーを多言語で解説。ボランティア解説員によるガイドの活用。</p>	<p>展示キャプションの一部の英訳ボランティアを近隣のグッドウィルガイド(日本政府観光局登録善意通訳団体)が進行中。</p>	<p>常設展示では各時代概説と主要展示品の解説パネルに英語と点字による解説を併設してきた。リニューアルオープン後は、展示解説・グラフィックパネルの多言語（英語・中国語・韓国語）による解説、点字による解説パネルを増加充実させた（令和3年度）。日本語のみの展示詳細解説に英語版を加える。QRコードを来館者の携帯端末で読み込んでもらい、英語解説にアクセスできる仕組みであり、以後順次充実をはかる（QRコード整備は本事業外）（令和4年度）。なお、令和3年度に整備した館内フリーWi-Fiを経由することで、来館者に通信料が発生しない環境を整えている。</p>	<p>東アジアと密接な関係を持っていた万葉の時代に倣い、増加する海外からの来館者に対応するため、上記のコンテンツ・システムのリニューアルに合わせて、多言語での情報発信力を強化する。（同じく5年後の完成を目途）</p> <p>2年後を目途に、国外から「万葉古代学」を研究する研究者を招聘する制度を復活し、世界的な視野の中で古代の万葉世界に対する研究、知見、理解を深め、その成果を国際的に発信することで、海外での「万葉マニア」のネットワークを拡充させ、来訪者の増加を図る。</p>	<p>英語に加え、奈良県への来訪が多い中国語、仏語、韓国語に対応。</p>

⑤拠点施設の要件に関する取組状況

要件	↓文化観光拠点施設名					
	独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館	奈良県立美術館	奈良県立民俗博物館	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県立万葉文化館	なら歴史芸術文化村
<p>・文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築</p>	<p>奈良県及び奈良市との協力。また、近隣社寺、観光案内所との連携。ロケーションコーディネーターを仲介しての連携。地域に係る文化観光推進事業者との連携として、奈良県の観光局では、知事を会長とし、県内全市町村、商工団体、交通事業者、旅行者など構成する「奈良の観光力アップ推進協議会」を設置しており、奈良国立博物館も委員となっている。この協議会では、県内の観光に関する課題認識とその克服のため、情報共有や意見交換を行ってきた。</p> <p>また、文化部局が観光部局と協力して実施してきた「奈良の仏像海外展示事業」では、有識者や関係社寺、報道機関等で構成する協議会に奈良国立博物館にも参加し、海外での歴史文化の発信でも連携を行ってきた。その他、観光PRの一環として首都圏での発信拠点である「まほろば館」での講演、奈良公園を活用した誘客イベントである「なら燈花会」や「なら瑠璃絵」への支援など、自治体観光部局等との連携、協力体制を築いている。</p> <p>日本香堂、近隣の商店街との連携、三越伊勢丹とのお中元等協力、賛助会企業会員との連携などを進める。</p>	<p>奈良県における文化観光に携わる組織体制は、歴史文化資源や芸術文化の活用による文化振興を担う文化担当部局、観光振興の中心を担う観光担当部局の他、観光に関することも含め奈良公園に関する事業を対象とする奈良公園室など、全庁的に連携して取り組む体制となっていることが特徴である。</p> <p>本計画における県立の施設については、文化部局の所管となっているが、奈良県においては全庁的な連携のもとに文化観光推進に取り組んできた。</p> <p>NPO 法人文化創造アルカとの連携による「きたまちと奈良女子大学の魅力発見ツアー」企画や、当館前庭での「きたまちマーケット」（参画店舗：奈良きたまち周辺の飲食店など）を開催し、当館を核とした地域の賑わいづくりを講じている。</p> <p>また、宿泊施設等と連携し旅行プランの造成を実施し、当館を核とした地域の魅力を再発見する機会を創出し首都圏等からの誘客に繋げている。</p> <p>①展覧会鑑賞、当館学芸員の出張講座、NPO法人文化創造アルカ主催による「きたまち百景を歩くツアー」を盛り込んだ宿泊プランを実施（R2年度企画展「広重の名所江戸百景」）</p> <p>②展覧会鑑賞、当館学芸員の出張講座を盛り込んだ、「公立共済やすらぎの宿」の宿泊パッケージツアー「歴史散策プラン 奈良の美術鑑賞と社寺を巡る旅」を実施（R3年度特別展「生誕200周年記念 森川杜園展」）</p>	<p>奈良県における文化観光に携わる組織体制は、歴史文化資源や芸術文化の活用による文化振興を担う文化担当部局、観光振興の中心を担う観光担当部局の他、まちづくりや県営の都市公園を活用したにぎわいづくりを担う部局など、全庁的に連携して取り組む体制となっていることが特徴である。本計画における県立の施設については、文化部局の所管となっているが、奈良県においては全庁的な連携のもとに文化観光推進に取り組んできた。</p> <p>令和3年度においては観光部局所管の首都圏における情報発信拠点である東京都港区の奈良まほろば館にて出張/パネル展「“くらし”を感じる日々の風景-なつかしくて新しい、奈良-」とワークショップ「毛糸でミニチュア杉玉をつくらう-お酒にまつわる奈良の風習-」を開催し、首都圏で素朴な魅力を情報発信した。</p>	<p>奈良県における文化観光に携わる組織体制は、歴史文化資源や芸術文化の活用による文化振興を担う文化担当部局、観光振興の中心を担う観光担当部局の他、観光に関することも含め奈良公園に関する事業を対象とする奈良公園室など、全庁的に連携して取り組む体制となっていることが特徴である。本計画における県立の施設については、文化部局の所管となっているが、奈良県においては全庁的な連携のもとに文化観光推進に取り組んできた。</p> <p>交通事業者と連携し、観光シーズンやイベント開催等に合わせ、周辺の文化資源文化施設と連携する臨時バスを運行予定。（2022年）</p>	<p>奈良県における文化観光に携わる組織体制は、歴史文化資源や芸術文化の活用による文化振興を担う文化担当部局、観光振興の中心を担う観光担当部局の他、観光に関することも含め奈良公園に関する事業を対象とする奈良公園室など、全庁的に連携して取り組む体制となっていることが特徴である。本計画における県立の施設については、文化部局の所管となっているが、奈良県においては全庁的な連携のもとに文化観光推進に取り組んできた。</p> <p>万葉文化館は、世界遺産登録を目指す「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の域内に位置し、県中南和地域の観光拠点ともなっていることから、研究機能の向上とそれに基づく情報発信力の強化に努めるとともに、周辺に位置する機関、施設と連携して周遊性を高めることにより、地域の価値・魅力を来訪者に積極的にアピールしていく拠点施設となるよう努める。</p> <p>来訪者のアメニティ向上のため、ミュージアムショップでは、地域の特産品の販売もっており、地産地消を徹底したカフェレストランも併設している。</p>	<p>奈良県における文化観光に携わる組織体制は、歴史文化資源や芸術文化の活用による文化振興を担う文化担当部局、観光振興の中心を担う観光担当部局の他、観光に関することも含め奈良公園に関する事業を対象とする奈良公園室など、全庁的に連携して取り組む体制となっていることが特徴である。本計画における県立の施設については、文化部局の所管となっているが、奈良県においては全庁的な連携のもとに文化観光推進に取り組んできた。</p> <p>2016年より、観光、金融、産業、行政等の関係者で構成する企画協議会の設置、運営等、施設を活用した地域活性化方策を継続的に検討。交通事業者やホテル事業者と連携し、開村から5月31日までシャトルバスを概ね30分に1本の頻度で運行し、6月1日以降は、来村者の利便性向上を目的としてデマンドシャトルを運行。さらに、7月1日からは奈良公園エリアとデマンド運行で結び、周遊に資するアクセス環境を整備予定。</p>
<p>このたび組織した「いかす・なら地域協議会」には、各施設長のほか、観光部局、文化部局ともに構成員として参加し、「いかす・なら地域計画」の効果的な実施に向け、より一層の連携体制を構築していく。</p>						
<p>・文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析</p>	<p>各施設の来館者数の他、県内への来訪者数や満足度等の情報を収集・整理・分析を行っている。</p> <p>情報の収集については各種観光統計情報、県民アンケート実施や、インターネット上でのアンケート実施、来館受付時の来館者数カウント等で実施。満足度についてはほぼ横ばいであるものの、来館者数は新型コロナウイルス感染拡大の影響で落ち込んでいる状況。</p>					
<p>・文化観光の推進に関する事業の方針の策定及びKPIの設定・PDCAサイクルの確立</p>	<p>長期的な社会背景の変化の中で目指すべき姿を定めた上で、短期的な課題事象にも適時に対応できる具体的施策を示す「奈良県観光総合戦略」を令和3年7月に策定。観光振興の土台づくり、自然・歴史・文化資源の活用等の施策体系ごとに目指す姿・取組の方向性等を定めた。</p> <p>KPIとしては観光消費額、宿泊者数、観光入込客数等を設定。年度ごとに成果を振り返り、分析を行い、事業を検討するPDCAサイクルを確立。</p> <p>また、令和4年中に県内の歴史文化資源の活用や文化施設との連携等を定める奈良県文化資源活用大綱、文化活動振興大綱を策定する予定。それぞれの大綱においてもKPIを定め、年度ごとに成果を振り返り、分析を行い、事業を検討するPDCAサイクルを確立予定。</p>					

⑥観光関係者（DMOなど）からの評価

<p>【県内DMOからの評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画目標について、全体的に目標値を下回っているが、これは新型コロナウイルス感染拡大の影響によるものと考えられる。 ・新型コロナウイルスの感染拡大がいつまで継続するか不透明であるが、アフターコロナを見据えた事業として各施設の受入体制を整備したことは評価できる。 ・今後、更なる訪問者増加・満足度向上のため、受入体制整備を継続するとともに、観光客を呼び込むためのソフト事業の更なる充実が必要と考える。

⑦今後の改善の方向性

<ul style="list-style-type: none"> ・中核とする文化観光拠点施設の諸事業の効果を把握するため、来訪者に対して実施事業に関するアンケート調査を実施。その結果を分析することにより、今後の事業実施の参考とする。 ・新型コロナウイルスの感染拡大がいつまで継続するか不透明であるが、アフターコロナを見据えた事業展開を検討。受入体制整備は令和3年度事業で進捗したため、今後は観光客を呼び込むためのソフト事業の展開を検討する。
